

「日々の理科」(第1899号) 2019,-9,20

## 「月夜のオーロラ(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

月明は、専門的なオーロラ観測にとっては、間違いなく障害になる。満月の日に天の川がほとんど見えないのと同じだ。しかし、月夜のオーロラは実に美しい。暗夜のオーロラよりも美しいと思う。



これも月夜のオーロラのワンカット。オーロラの手前に、高層雲や層積雲がかかって、邪魔をしている。雲はせいぜい高度10~12kmの「対流圏」に出現する。しかし、オーロラはそれよりはるか上空「成層圏」「中間圏」も乗り越えて、「熱圏」(高度100~800km)に出現する。ISS(国際宇宙ステーション)の巡航高度である。



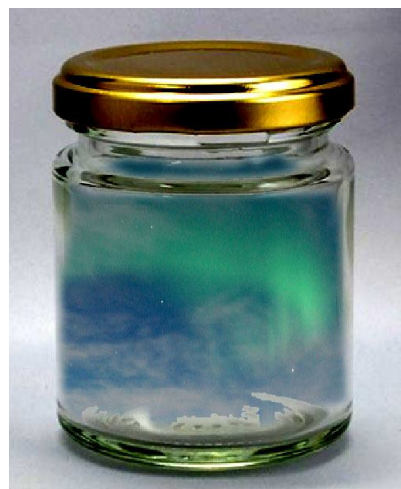
頭の中ではそのことがわかっている、月夜のオーロラ、特にまばらな雲がかかっていると、オーロラは近くに見える。確かに雲よりも向こう側にあるはずなのに、雲と同じぐらいの位置か、手前に突き出して見えるような時もある。



私は2018年1月に、スウェーデン最北部のビットンギ村郊外で、月夜のオーロラを見た。その時も薄い雲がかかっていたが、手を伸ばせば触れそうなくらい、近くに見えた。実に不思議な体験だった。



写真でもそのような印象を受けると思う。まるで、オーロラが雲から手前に飛び出てきたようにさえ見える。オーロラの実体を通り抜けられるのは、宇宙飛行士だけだが、私は実際にこの雪原で、オーロラの光の中に入ったような錯覚に陥ったものである。



オーロラを素手で触った人類はまだいない。高度100km以上といえ、限りなく真空に近い空間だし、そもそもその高度に達することは不可能に近い。しかし、もしオーロラに触れれば、私はこのよう

にガラスの瓶に入れて持ち帰り、そのまま部屋に飾っておきたいと思った。